

「あの…私…
プロデューサーさんだ」

「告白しなければ
ならないことがありません…」



「本当にごめんなさい……」

「私……プロデューサーさん
以外の人の子種で
出来ちゃったんです……」



「プロデューサーさん以外の人間なんて
考えられなかったんですけど」

「気が付けばすっかりハマってしまって
もう取り返せない身体に……」





「はぁっ……♡」

はぁっ♡

はぁっ♡

あん♡

あん♡

はぁっ♡

はぁっ♡

はぁっ♡

はぁっ♡

はぁっ♡

はぁっ♡

はぁっ♡

はぁっ♡

「キスだけで……
発情しちゃう……♡」



「プロデューサーさん
見えてますか？ 私たちが
繋がっているとこる……」

はぁっ

はぁっ

「私たちの交尾……
ちやんと見てくださいら♡」

はぁっ

はぁっ

はぁっ

はぁっ



プロデューサーさんのじゃ
届かないところまで届いて
とてもきもちいいです…」

「ごめんなさい…
こんないけないアイドルに
なってしまうて♡」





「あっ……♡
い……イ……」

「イ……イ……
イ……ちやう……♡」











好き♡

好き♡

好き♡

好き♡

んんん

好き♡

んんん

んんん

んんん

「ああっ……
つい夢中になっちゃって……
へへっ……♡」

「どうしてかで
私……アイドルはもう無理だと
思います……ごめんなさい……」



「ねえ…
報告も終わったし…」

「褒美でお腹の赤ちゃんに
たくさんザーメンミルク
ちょうだい…♡♡♡」











